



奇蹟の芸術都市

バルセロナ展

2019.

2020.

11 / 15(金) ~ 1 / 19(日)

ガウディ、ピカソ、ミロ、ダリ… 巨匠たちを育んだ魅惑の街

主催：静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、Daiichi-TV

特別協力：カタルーニャ美術館、カウ・ファラット美術館

後援：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、スペイン大使館、カタルーニャ州政府、カタルーニャ州政府貿易投資事務所、

在バルセロナ日本国総領事館、インスティトゥト・セルバンテス東京、日本・カタルーニャ友好親善協会

協賛：マリエラ クラソンズジャパン、株式会社ライブアートブックス 特別協賛：**セキスイハイム東海**

助成：ラモン・リュイ財団、シッジャス文化財団 協力：日本航空

企画協力：神戸新聞社、キュレイターズ

Daiichi-TV開局40周年記念

休館日：毎週月曜日(ただし1月13日は開館、1月14日(火)休館)、12月30日(月)~1月1日(水・祝)

開館時間：10:00~19:00(展示室入場は閉館の30分前まで)

観覧料：一般 1,200(1,000)円、大高生・70歳以上 800(600)円、中学生以下無料

* ()内は前売および当日に限り20名以上の団体料金 *障がい者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料

【前売券：10月1日(火)~11月14日(木)まで販売】

取扱場所：静岡市美術館、チケットぴあ、ローソンチケット、セブンチケット、静岡市内の主な書店等

***お得な一般前売ペア割チケット 2枚1組 1,800円**

取扱場所：静岡市美術館、チケットぴあ、ローソンチケット、セブンチケット

※当日ペア割チケットの販売はございません。



静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

展覧会担当：小川・伊藤 広報担当：大庭・岡田 info@shizubi.jp

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

Aoi Tower 3F, 17-1, Koyamachi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN

tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

スペイン・カタルーニャ自治州の州都バルセロナは、古来、地中海交易の要所として栄えました。18世紀後半以降は、新大陸との貿易や産業革命によって経済的に大きく発展し、町の近代化が進んでいきます。19世紀後半には、中世の様式やフランスのアール・ヌーヴォーなどの同時代の他国の芸術運動が結びついた「ムダールニズマ」と呼ばれる新しい芸術様式が生まれ、アントニ・ガウディ(1852-1926)やリュイス・ドゥメナク・イ・ムンタネー(1849-1923)らによる独特のスタイルを持つ建物が次々と造られていきました。また若き日のパブロ・ピカソ(1881-1973)やジュアン・ミロ(1893-1983)、サルバドール・ダリ(1904-1989)は、19世紀末から20世紀初頭にかけてバルセロナで過ごし、独自の表現を模索し続けました。

本展は、今もなお多くの人々を引き付けてやまない都市バルセロナの魅力の源泉を、町の近代化を促進させた19世紀後半のイルダフォンス・サルダー(1815-1876)による新たな都市計画から、20世紀のスペイン内戦(1936-39年)までの約80年間に生み出された芸術作品の中に辿ろうとするものです。カタルーニャ美術館などの協力により、絵画や家具、宝飾品など多彩なジャンルによる作品約130点で、近代カタルーニャ芸術の精華をご紹介します。

【本展のポイント】

①カタルーニャ美術館等からの全面的な協力による、 日本では約30年ぶりの近代カタルーニャ美術の展覧会

近代のカタルーニャ美術がまとまって紹介されるのは、日本では1987年以来、約30年ぶりとなります。カタルーニャ美術館、カウ・ファラット美術館など、カタルーニャを代表する美術館の数々からの全面的な協力により、珠玉の作品が数多く展示されます。

②日本初公開となる作品が多数出品

出品作のほぼ半数以上が日本初公開。個人所蔵の貴重な作品や資料も出品されます。

③多様なジャンルの作品約130点で街の発展と芸術の動向をたどる

絵画や彫刻だけでなく、建築図面、家具、タイル、ガラス、宝飾品、磁器など多様なジャンルの作品で18世紀以降大きく発展したバルセロナの街の歴史をたどりながら、そこに花開いた芸術を紹介します。

④ガウディ、ピカソ、ミロ、ダリなど、日本でもおなじみの巨匠たちの作品も展示

日本でも人気の高いガウディ、ピカソ、ミロ、ダリらの作品も多数出品。普段貸し出される機会の少ない貴重な作品も含まれ、バルセロナで活躍した巨匠たちの様子を余すことなくご紹介します。

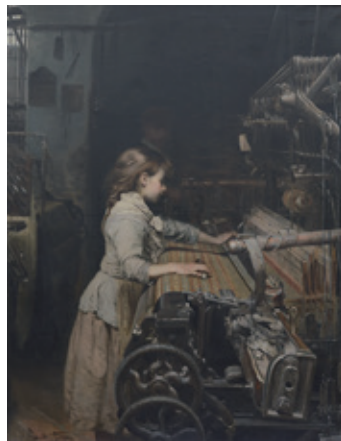
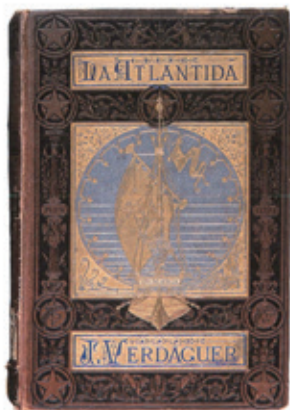
第1章：都市の拡張とバルセロナ万博

18世紀後半以降、経済発展に伴い人口が急増し過密化したバルセロナでは、都市の拡張が急務となります。19世紀半ばには、町の拡大を妨げていた旧市街の城壁（市壁）の取り壊しと、市壁外への街の拡張が認められ、その後土木技師イルダフォンス・サルダーによる新しい都市計画プランのもと、近代都市としての整備が進みました。1888年には万国博覧会が開催され、またこの頃「ラナシェンサ」と呼ばれるカタルーニャ語とその文化の復興運動も活発化しました。

本章では、近代化を遂げ、国際都市へと発展するバルセロナの姿を、書籍や絵画などでご紹介します。

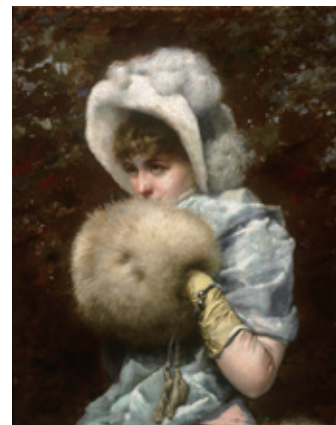
「ラナシェンサ」の
英雄的詩人の代表作

→
ジャシン・バルダゲー
『アトランティダ』 1878年刊
書籍 カタルーニャ図書館
©Biblioteca de Catalunya, Barcelona



経済発展を支えた
若い労働者を描いた逸品

←
ジュアン・ブラネッリャ
《織工の娘》 1882年
油彩/カンヴァス 個人蔵



→
フランセスク・マスリエラ
《1882年の冬》 1882年
油彩/カンヴァス
カタルーニャ美術館
©Museu Nacional d'Art de Catalunya, Barcelona (2019)



←
G. L. ルイス
《1888年バルセロナ万博のポスター》
1888年 クロマトグラフ・リトグラフ/紙
カタルーニャ図書館
©Biblioteca de Catalunya, Barcelona

第2章：コスモポリスの光と影

好調な経済を背景に、資金力の豊富なブルジョワたちの注文によって、19世紀末から20世紀初頭にかけて、華やかで独創性溢れる建築が、バルセロナの街に次々と作られました。家具調度品や装飾品にも贅を尽くしたものが数多くみられます。一方で、その煌びやかな生活の裏には過酷な生活環境を強いられる労働者たちがおり、世紀の変わり目にかけて両階級間の溝はますます深まっています。本章では、アントニ・ガウディ、ドウメナク・イ・ムンタネー、プッチ・イ・カダファルクら建築家たちの仕事を中心に、図面や建築装飾、家具、宝飾品などでブルジョワたちの生活の様子を紹介するだけでなく、時代の不穏な空気を捉えた絵画なども合わせて展示します。

家具もデザインした
ガウディ

→
アントニ・ガウディ (デザイン)
カザス・イ・バルデス工房
《カザ・バツリョーの組椅子》
1904-06年頃 トネリコ材
カタルーニャ美術館
(サグラダ・ファミリア建築委員会から寄託)



©Fundació Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família



←
リュイス・マスリエラ
《バルセロナ上空の飛行機》
1905年頃
金・ダイヤモンド・エナメル(プリカジュール)
個人蔵



↑ラモン・カザス
《サンタ・マリア・ダル・マール教会を出発する聖体祭の行列》
1896-98年頃 油彩/カンヴァス
カタルーニャ美術館
©Museu Nacional d'Art de Catalunya, Barcelona (2019)



ブルジョワたちの
煌びやかな生活

←
ルマー・リベラ
《夜会のあとで》
1894年頃 油彩/カンヴァス
カタルーニャ美術館
©Museu Nacional d'Art de Catalunya, Barcelona (2019)

第3章：パリへの憧憬とムダルニズマ

19世紀末から急速に近代化を遂げたものの、バルセロナでは美術を取り巻く環境は未だ十分に発展しているとはいえ、この時代の若い芸術家にとって憧れの場所はパリでした。その中でラモン・カザス(1866-1932)とサンティアゴ・ルシニョル(1861-1931)は、パリとバルセロナを行き来する中で、最新の芸術様式や手法に触れる一方、故郷の芸術にも新たな可能性を見出そうとしました。やがて彼らの活動は美術の分野にとどまらず、音楽や文学などにも及び、領域を超えた総合芸術を志向するようになっていきます。ここでは、中世の様式や、フランスのアール・ヌーヴォーなどの同時代の他国の芸術運動が結びついた「ムダルニズマ」と呼ばれる芸術様式が登場した、19世紀末～20世紀初頭のバルセロナで活動した芸術家たちの作品をご紹介します。

パリ滞在中に描かれた1枚

→
ラモン・カザス
《ムーラン・ド・ラ・ギャレットの室内》
1890-91年頃 油彩/カンヴァス
カタルーニャ美術館(スペイン文化省から永久寄託)
©Museu Nacional d'Art de Catalunya, Barcelona (2019)



スポーツマンでもあったラモン・カザス

←
サンティアゴ・ルシニョル
《自転車乗りラモン・カザス》
1889年 油彩/カンヴァス
サバデイ銀行
©Banco Sabadell collection



↑サンティアゴ・ルシニョル
《青い中庭》 1892年頃
油彩/カンヴァス
ムンサラット美術館
©Museu de Montserrat

第4章：「四匹の猫」

1897年6月、カザスとルシニョル、そして彼らと1890年代初頭にパリでともに過ごしたミケル・ウトリリョ(1862-1934)、ペラ・ルメウ(1862-1908)らによって、カフェ兼レストラン「四匹の猫(アルス・クアトラ・ガッツ)」がバルセロナに開店します。この店には、新しい芸術を模索する画家、音楽家、作家たちが足しげく通い、店では人形劇やコンサートなどのイベントも開催されました。カザスと同世代の仲間たちだけでなく、やがてより若い世代の芸術家たちも店に出入りするようになります。その中にはパブロ・ピカソの姿もあり、ピカソ初めての個展が行われたのはこの「四匹の猫」でした。本章では、「四匹の猫」の様子を伺い知ることのできる貴重な資料や、そこに集ったピカソをはじめとする先鋭的な芸術家たちの作品を展示します。

影絵芝居も「四匹の猫」で行われた演目の一つ

→
ラモン・カザス
《影絵芝居のポスター》
1897年 リトグラフ/紙
マルク・マルティ・コレクション
©Marc Martí CoHección



↑ジュアキム・ミール 《魅惑の入江—マジョルカ》
1901年頃 油彩/カンヴァス カタルーニャ美術館
©Museu Nacional d'Art de Catalunya, Barcelona (2019)

ピカソに影響を与えた先輩画家

←
イジドラ・ヌネイ
《若いジプシー女》
1903年 油彩/カンヴァス
カタルーニャ美術館
©Museu Nacional d'Art de Catalunya, Barcelona (2019)



第5章：ノウサンティズマ—地中海へのまなざし

20世紀に入ると、保守的なカタルーニャ主義者たちを中心に、カタルーニャの民族的アイデンティティへの希求が高まります。その動きは芸術にも波及し、フランスなど他国の様式からの影響の強い「ムダルニズマ」に代わり、「ノウサンティズマ(1900年代主義)」と呼ばれる新しい芸術動向が生まれました。古典古代のアルカイックな造形など、地中海沿岸で育まれてきた美の様式への回帰を主な特徴とするこの運動は、これまで日本では紹介される機会があまりありませんでした。本展ではこの運動について、絵画や彫刻、工芸作品を中心にをご紹介します。また、「ノウサンティズマ」の集大成ともいわれる、1929年のバルセロナ国際博覧会に関する資料も展示します。

カタルーニャの民族舞踊
「サルダーナ」を踊る人々

→
シャビエ・ヌゲース、
フランセスク・ケー
《レストラン「カン・クリヤレタス」の
タイル壁画(サルダーナ)》
1923年 施釉タイル
バルセロナ・デザイン美術館
©Barcelona Design Museum and the donator



ピカソと同年の
もう一人のパブロによる作品

←
パブロ・ガルガーリョ
《ピカソの頭部》 1913年 石灰岩
カタルーニャ美術館
©Museu Nacional d'Art de Catalunya, Barcelona (2019)



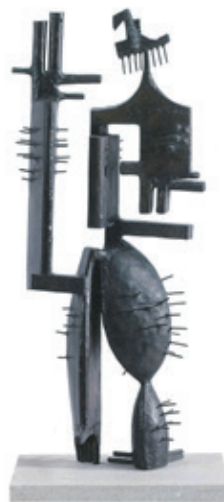
↑ジュリ・ゴンザレス 《母と子》
1912-14年頃 油彩・木炭/板紙 ゴティア財団
©Fundación Francisco Godia, Barcelona

第6章：前衛美術の勃興、そして内戦へ

20世紀初頭のバルセロナには、より前衛的な表現を追求する動きもあり、1906年に開廊した「ダルマウ画廊」は、バルセロナにおける前衛美術の一大拠点となり、キュビズムなどの最新の美術動向を紹介する展覧会などのほか、ジュアン・ミロやサルバドル・ダリらの初個展が開催されました。新しい表現を求める動きは建築でも見られ、ジュゼップ・リュイス・セルト(1902-83)はル・コルビュジエなどのモダニズム建築に影響を受けた建築を発表します。その後もバルセロナでは様々な前衛芸術運動が起こりますが、1936年にスペイン内戦が勃発すると、彼らの多くは国外滞在を余儀なくされました。やむなく故郷を離れざるを得なかった彼らの思いは、ピカソの《ゲルニカ》が展示されたことで有名な1937年パリ万博のスペイン共和国パビリオンに結実しました。本章では、20世紀初頭から内戦勃発に至る時期のバルセロナの芸術動向を紹介します。

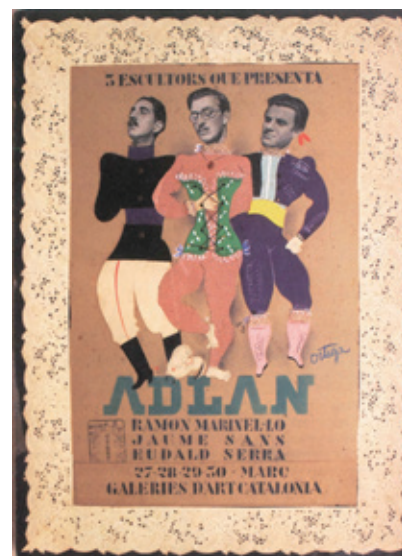
ミロやダリも設立に関った、前衛的な
バルセロナの芸術愛好サークル「ADLAN」

→
サルバドル・ウルティガ 《ADLAN展覧会ポスター：三人の彫刻家たち》
1935年 コラージュ・フォトモンタージュ
個人蔵



内戦終了の年に制作
刺々しい腕の先は銃器を思わせる

←
ジュリ・ゴンザレス
《サボテン人間I》
1939年 ブロンズ・鉄鋸
カタルーニャ美術館
©Museu Nacional d'Art de Catalunya, Barcelona (2019)



会期中の主な関連イベント

◆講演会

①「芸術都市バルセロナの変容： アイデンティティの探求と前衛美術」

日時：11月23日（土・祝）14：00－15：30
（開場 13：30）

講師：^{きのした あきら}木下 亮氏（本展監修者、昭和女子大学教授）

申込締切：11月7日（木）必着

②「ガウディとバルセロナの世紀末建築」

日時：12月14日（土）14：00－15：30
（開場 13：30）

講師：^{とりい とくとし}鳥居 徳敏氏（神奈川大学名誉教授）

申込締切：11月28日（木）必着

①・②いずれも

会場：当館多目的室 参加料：無料 定員：70名（応募多数の場合は抽選）

※申込方法

当館HP申込フォーム（www.shizubi.jp）または往復はがきにて。1件につき4名様まで。

※往復はがき記載事項

①催事名、催事日 ②氏名（参加人数分） ③年齢 ④住所（郵便番号から） ⑤電話番号、返信面に宛先を記入の上、静岡市美術館まで。（抽選の如何にかかわらず結果は通知いたします。）

◆当館学芸員によるスライドトーク

日時：12月21日（土）、1月12日（日） いずれも14：00－（40分程度）

会場：当館多目的室 参加料：無料

※事前申込不要、当日直接会場へお集まりください。

静岡・音楽館×科学館×美術館 共同事業

静岡学芸員
フェスタ2019

◆「奇蹟の芸術都市バルセロナ展」

ミュージアム・コンサート

日時：11月17日（日）14：00開演（開場13：30）

会場：当館多目的室

参加料：1,000円（全自由、チケット制）

※6月15日（土）より当館受付および静岡音楽館AOI受付にて販売（静岡音楽館倶楽部会員は6月8日（土）より先行販売。）
※定員になり次第販売終了、当館ではお電話での予約はできません。予約ご希望の場合は静岡音楽館AOIまでお問合せください。
※未就学児入場不可

出演：^{いこま わねあき}生駒宗煌（チェロ）、^{きむらりさ}木村理沙（ピアノ）

曲目：カタルーニャ民謡〈鳥の歌〉（P.カザルス 編）、

I.アルベニス：マヨルカ（舟歌）op.202 ほか

主催：静岡音楽館AOI（TEL: 054-251-2200）

共催：静岡市美術館



生駒宗煌
（チェロ）



木村理沙
（ピアノ）

◆ Shizubi シネマアワー vol.25

もっと知りたい建築の世界



©Fontana Film GmbH, 2012

①『創造と神秘のサグラダ・ファミリア』

（監督：ステファン・ハウプト/2012年/スイス/94分）

日時：11月30日（土）14：00－

（開場13：30）



②『もしも建物が話せたら』

（監督：ヴィム・ヴェンダース、ミハエル・グラウガー、マイケル・マドセン、ロバート・レッドフォード、マルグレート・オリン、カリム・アイノズ/2014年/ドイツ、デンマーク、ノルウェー、オーストリア、フランス、アメリカ、日本/165分）

日時：12月1日（日）14：00－

（開場13：30）

①②いずれも

会場：当館多目的室 ※簡易の映像設備での上映になります。

参加料：500円（チケット制）

チケット販売：10月29日（火）より当館受付にて販売

（定員になり次第販売終了）

定員：各回70名 企画協力：（株）サールナートホール